

Emma Bridges, Edith Hall and P.J. Rhodes (eds.),

Cultural Responses to the Persian Wars:

Antiquity to the Third Millennium

阿部 拓児

ペルシア戦争というのは、究極に言えば、今から二五〇〇年前にバルカン半島の一角でおこなわれた一連の「局地」戦（マラトンの戦い、テルモピュライの戦い、サラミスの海戦、プラタイアの戦いなど）の総称に過ぎない。ところが、大國ペルシアに立ち向かったギリシア小國連合の奇跡的な勝利は、歴史の中で幾度となく語り直され、いつしかオリエントの専制にたいする西洋的自由の必然の勝利という「世界」史的な事件へと変質していった。しかし、ペルシア戦争は、このような大局的な視点からのみ観察されてきたわけではない。さわめて日常的なレベルでも受け入れられてきた。

たとえば、いまや日本の国民的スポーツとも言えるマラソンが、マラトンの戦いでのアテナイ勝利を伝えるべく激走した伝令使が、任務遂行の直後に息絶えたという故事に倣って創設されたことは、広く知られるエピソードであろう。また、二〇〇三年公開のヒット映画『ラストサムライ』で、明治政府の元お雇い外国人ネイサン・オールグレン大尉（トム・クルーズ）は、反乱士族の領袖で「最後の侍」こと勝元盛次（渡辺謙）に、寡兵の叛軍で多勢の官

軍に立ち向かうことも無駄ではないと、テルモピュライの戦いを引例する。さらには、一九九九年に日本に上陸したベルギー・チョコレートのお菓子の老舗「レオニダス」は、創業者であったギリシア人菓子職人レオニダス・ケステキデイス氏と同名を持つ、テルモピュライの戦いで壮絶な死を遂げたスパルタ王レオニダスの肖像を店舗の意匠として採用している。

このようにペルシア戦争はアカデミックな分野のみならず、ポップチャー・カルチャーに至るまで、広く浸透している。この戦争の受容、特に時代ごとの相をとらえることを目的に二〇〇三年七月、英国ダラム大学にて、エンマ・ブリッジズを代表とする研究会が開催された。本書は、この研究会とその後数度のセミナーでの報告をもとにして、編纂された。

本書は全五部、一七章から成る。時代ごとの広がりをとらえるという本書の趣旨通り、各章はおおむね時代順に配置されている。まずは、それらの内容を紹介し、適宜論評を加えたい。

第一部「原型」はペルシア戦争の同時代史的分析。三人の編者（エンマ・ブリッジズ、イーデイス・ホール、P・J・ローズ）による「序章」に続き、第二章「古典期ギリシアにおけるペルシア戦争のインパクト」（P・J・ローズ）は、二二〇年にわたるアカイメネス朝ペルシア帝国の歴史を、特に帝国とギリシア諸都市との関係に注目しながら概観し、読者の知識を整理する。

第三章「クセルクセスのホメロス」（ジョアネス・ハウボルド）は、ペルシア帝国がギリシアの世界観をいかに利用したかについての論考。ハウボルドの説によれば、多言語・多宗教的な世

界帝国の支配者であったペルシア人たちは、自らの支配の正当性を説明するために、他者の世界観を積極的に取り込み、利用した。やがて、このペルシア人によって受容された世界観はギリシアに逆輸入され、結果トロイア戦争とペルシア戦争を同列視するような歴史観が生まれたのだという。刺激的な論考ではあるが、当事者であるペルシア側の史料から論を補強できないのは、やはり残念である。

第四章「エレウシスからの視点——ペルシア戦争におけるデメテル」(デボラ・ポーデッカー)。ギリシア人たちは、ペルシア戦争の勝利を神々の加護によるものと考え、戦後は多くの神々に感謝を捧げた。ポーデッカーは、これら神々の中で特に、一見すると戦争とは無関係なように思われる、豊穡と秘儀の女神エレウシスのデメテルが戦勝に大きく尽力したと考えられていた理由を問い、そこにアテナイの政治意図とデメテルが持つ境界線の守護者としての側面を指摘する。

第二部「古代の変形」は、ペルシア戦争から一世紀経過した後からローマ帝政期までの古代世界におけるペルシア戦争の受容を扱う論考四篇が収められている。

第五章「プラトンとペルシア戦争」(クリストファー・ロウ)。
 プラトン『法律』第三巻のアテナイ国制にかんする記述からは、プラトンがペルシア戦争時(前五世紀前半)のアテナイを称賛しているかのように読まれる。しかし、プラトンは彼の同時代(前四世紀前半)の状況と比較した上で、一世紀前のアテナイを評価しているに過ぎず、前五世紀のアテナイを本質的に理想的な国家モデルとは考えていなかったのだと、ロウは主張する。本章は

「プラトンとペルシア戦争」と題されているが、より正しくは「プラトンと前五世紀のアテナイ国制」となるべきであり、ペルシア戦争の受容相をとらえるという本書の趣旨からは、内容的に外れているように思われた。

第六章「前四世紀の弁論と歴史叙述の中のペルシア戦争」(ジョン・マリニコラ)。現代の研究者にとってヘロドトス『歴史』はペルシア戦争の「正典」である。しかし、戦争からまだ時が浅い前四世紀には、『歴史』は「正典」としての地位を確立しておらず、個々の弁論家、史家たちには自らの判断によって事実を自由に書き加える余地が残されていたと、マリニコラは指摘する。そのため多くの異伝が生まれることになったのだが、それらの分析の結果、マリニコラは主に以下の二点を明らかにする。まず、ヘロドトス『歴史』では、決戦を前にしたギリシア軍内に動揺が見られるが、前四世紀の記述では、ギリシア軍は自軍の最終的な勝利が約束されているのごとく、確信的に行動を取る。また、『歴史』では戦勝に果たしたアテナイとスパルタの役割に比重が置かれているのに対し、前四世紀の記述では、この二都市のみならず他都市の活躍も強調されるようになった。大国に果敢に立ち向かう小国連合というペルシア戦争の神話化がかなり早い段階で始まっていたことを確認できる、興味深い論考である。

第七章「ローマにおけるペルシア戦争のイメージ」(フィリップ・ハーデイ)は、ローマ帝政初期におけるペルシア戦争の表象を扱った論考。ハーデイは図像や文学作品の中から数々の事例を提示し、アウグストゥスと彼の後継皇帝たちが、ローマ帝国の東方の敵(エジプトとパルティア)との対立を、ペルシア戦争にな

ぞらえていたことを例証する。

第八章「『ブルタルコス』の悪意について」——ブルタルコス、ヘロドトス、ペルシア戦争」（クリストファー・ペリング）は、同じくローマ帝政初期の、しかしギリシアの文人に焦点を当てた論考。ブルタルコスはペルシア戦争に言及する際、しばしばヘロドトス『歴史』から引照している。そのような箇所を分析すると、ブルタルコスの著作間で、同一のエピソードにたいし異なった評価が下されている事例を多々発見できる。このことからペリングは、作品の性格、すなわち伝記またはエッセイの主題に合わせるブルタルコスの柔軟性を指摘する。しかし、本章は稀代のエッセイストの先人にたいする態度を問うているのであって、彼のペルシア戦争観については論じていない。

第一部、第二部が古代史の専門領域を扱っているのにたいし、以降の部は近現代史を対象とする。第三部「ルネサンスと啓蒙主義時代の再発見」、第四部「国民性とアイデンティティ」の諸論考は、一八、一九世紀におけるペルシア戦争の受容相を問題とする。

第九章「アイスキュロス『ペルシア人』——オスマン帝国経由、サダム・フセインまで」（イーディス・ホール）は、古代から現代に至るまでの、アイスキュロス『ペルシア人』の上演形態をたどり、そこに垣間見られる自他認識のあり様を浮かび上がらせる。『ペルシア人』は現存するギリシア悲劇作品の中で、唯一史実に取材しており、サラミス海戦の結果を敗者であるペルシア帝国の宮廷から描いた作品である。それだけに、単純な自己称賛にはつ

ながらず、演出家が他者に何を求めているかを窺い知れる作品でもある。『ペルシア人』は、すでに初演（前四七二年）直後に、カルタゴ人、エトルリア人を海戦で破った僭主の求めによって、シチリア島で再演されており（前四七〇年）、ギリシア人对ペルシア人という本来の文脈とは異なった文脈（ギリシア人对カルタゴ人・エトルリア人）に置かれた。その後、近世に入ると、オスマン帝国が西洋に相対する「オリエン特」として認識されていき、一九世紀初頭のギリシア独立戦争前後には、『ペルシア人』はギリシア人の愛国心を高揚させる教材として利用されるようになった。しかし、第二次大戦以降には、ペルシア帝国とギリシア極右政権やナチ政権を重ね合わせた演出が見られるようになる。また、一九七一年のシーラーズ・ベルセポリス国際芸術祭では、ダレイオスとクセルクセスの墓前で『ペルシア人』から筋を織り込んだ創作劇『オルガスト』（英国人ビーター・ブルック演出）が上演された。さらに、米国人ビーター・セラーズ演出の『ペルシア人』（一九九三年初演）では、舞台はスサからバグダードへ移され、クセルクセスはサダム・フセインに置き換えられたが、そこで浮き彫りにされるのは、敗者であるペルシア人イラクの愚かさと同時に勝者ギリシアアメリカの残忍さであり、イラク戦争開戦に衝き動かされた米国人エレン・マクローリンの脚本（二〇〇三年）では、ペルシア大王クセルクセスがアメリカの軍服を着る。この二作品はいずれも好評で、再演された。このように、『ペルシア人』上演の文脈は、かつてのような自他の単純な二項対立を乗り越え、自己批判あるいは自他対立の解消へと向かっていったと、ホールは結ぶ。二五〇〇年もの時を見直し、ペルシア戦争を

めぐる自他認識の変遷を跡付けた本章は、本書でもっとも卓抜な論考である。

第一〇章「ヘレスポントスのエピソードについてのオペラ劇の変化」(デイヴィット・キンベル)は、ギリシア遠征の途上、ヘレスポントス(ダーダネルス)海峡を舞台にペルシア大王セルセ(クセルクセス)を中心とした架空の愛憎劇を描く、ヘンデル作曲のオペラ劇『セルセ』(一七三八年初演)誕生の経緯を探る。

本章は、オペラ発展史の研究であって、ペルシア戦争の受容とはほとんど関係がない。また音楽学を専門とする論者によるもので、本書の中でも異色の一篇である。

第十一章「力の聖地」——ペルシア戦争古戦場の再発見(イアン・マクレガー・モリス)は、テルモピュライの古戦場をめぐる、近代西洋人の葛藤を描く。テルモピュライの古戦場としての価値が顧みられるようになったのは、一七世紀以降、主として一八世紀のことである。そのときまでに、すでにテルモピュライの地形は変化し、古典テクストが伝えるような大軍防衛に適した隘路ではなく、古戦場を前にした近代人たちは理想と現実の間で思い悩んだ。ある者は地形の変化を認めず、またある者はテルモピュライの植物や空気が「古」を感じただけで諒としたという。

第十二章「マラトンからワテルローへ——バイロン、戦勝モニュメント、ペルシア戦争」(ティモティー・ルド)は一九世紀ブリテン島におけるマラトンの戦い人気の背景を論じる。ルドは一九世紀英国の歴史画家ベンジャミン・ハイドンの活動(マラトンの戦場から市街へ激走した伝令使の絶命場面を描画し、またワテルローの戦勝記念としてバルテノン型モニュメントの建

設計画にのめり込んだ)と、ワテルロー・マラトンの両戦場を訪れた詩人バイロンをめぐる評価を分析し、ワテルローの戦勝と同列視されることにより、マラトンの戦いへ注目が高まったと結論する。

第十三章「歴史の上演と愛国的神話——ギリシア独立戦争前夜のアイスキュロス『ペルシア人』(ゴンダ・ファン・ステーン)は、ある駐イスタンブル・フランス大使の回想録を繙き、ギリシア独立戦争の前年(一八二〇年)におこなわれたイスタンブルの個人宅でのアイスキュロス『ペルシア人』朗読会の様子を魅らせ、ギリシア古典テクストが現代ギリシアのパトリオティズム涵養に果たした役割を明らかにする。ホール論文(第九章)が示した見取り図を、ミクロな視点から補強する論考である。

第十四章「歴史叙述の「起源」としてのペルシア戦争——ジョージ・グロート『ギリシア史』における古代と現代のオリエンタリズム」(アレクサンドラ・リアネリ)は、近代のギリシア史研究の祖とされるグロートの『ギリシア史』(一八四六—五六年)の分析。リアネリは、いかにしてペルシア戦争が東洋と西洋文明と野蛮の対立へと昇華したかに留意しながら、『ギリシア史』を読み解く。グロートは神話と歴史の峻別を意識しながら、『ペルシア戦争』を叙述の基点に据えたことにより、ペルシア戦争に歴史の起源としての意義を与えたのであると、リアネリは結論する。しかし、第二章と本章はともに一九世紀前半の英国を論じながら互いの接点を見出さないことは、論文集としての利点を逃してはいまいか。

第十五章「歴史に直面した「われわれのような人々」——コル

モン「サラミスの勝者」(クレメンヌ・シュルツ)は、フランスの画家、フェルナン・コルモン(日本でもポスター画や挿絵で有名なロートレックの師)作の「サラミスの勝者」(一八八七年発表)を多角的に読み解く。プーランジェの大衆迎合的な政策が人気を獲得し、古典古代を異質な他者として見るべきとの歴史家クーランジュの主張がやや反感を持たれていた当時の社会状況で、普通の人々による歴史的な勝利を描いたコルモンの絵は好意的に受け入れられたのだと、シュルツは指摘する。

第五部「二〇世紀のレオニダス」所収の二編は、現代のポピュラー・カルチャーにおけるテルモビュライの戦いの受容を論じている。

第一六章「クセルクセス、ハリウッドへ行く」(D・S・レヴィン)は、一九六二年に公開されたハリウッド映画『スパルタ総攻撃』の分析。本作はテルモビュライの戦いで自由を死守せんがために犠牲となった、レオニダス王と配下のスパルタ人三〇〇人の物語である。レヴィンはまず、本作が冷戦構造を反映して、民主主義(ギリシアアメリカ)の反民主主義(ペルシアソ連)

にたいする勝利を描いていると指摘する。ここには寡頭制国家スパルタにアメリカを重ね合わせるという矛盾が生じるが、レヴィンはその矛盾を隠すために張られた、数々の仕掛けを暴いていく。

第一七章「勇気と栄光——プレスフィールド『炎の門』のスパルタ人たち」(エンマ・ブリッジス)は、米国の小説家ステイヴン・プレスフィールド(ゴルフ小説のベスト・セラー『バガー・ヴァンスの伝説』の作者として有名)の『炎の門』(一九九八年)^③を対象とする。『炎の門』は、スパルタに流れ着き、市

民兵の従者となった一戦争孤児の回想録という体裁で、ペルシア軍到来前の国内の緊張からテルモビュライでの壮絶な敗戦までを活写する。ブリッジスは、ペルシア戦争を主題として書かれた英語圏の歴史小説を回顧した上で、『炎の門』をもっとも成功した作品として評価し、その理由に迫る。本章は論考というよりもむしろ、『炎の門』の書評である。

以上が本書各章の内容である。本書にはすぐれて意欲的かつ包括的視野からの論考が見られる一方で、本書の趣旨とはそぐわないと思える議論も含まれている。各章ごとの時代、地域の転換も激しく、章間の連関も希薄で、個別論文の「寄せ集め」との印象を拭えない。特に本書が「結論」に当たる章を欠いていることがこの印象を強め、一貫した興味、関心を持って、あるいは何らかの通時的な理解を得ようとの目的から、本書を通読することはかなり困難である。したがって、本書全体にかかわるコメントを加えることは難しいのだが、ここでは以下の二点を指摘しておきたい。

本書中でもっとも長いタイム・スパンで考察をおこなっているイーデイス・ホールの論考によれば、ペルシア戦争が置かれていた文脈は、本来のギリシア人とペルシア人の対立を離れ、前世紀末には自他対立の解消へとむかっていたという。しかし、これは本当であろうか。ここで、ペルシア戦争をめぐる最新の議論を紹介して、検討したい。

二〇〇七年、すなわち本書出版の年に、やはりテルモビュライの戦いに取材したハリウッド映画『スリーハンドレッド』が公開

された。本作はCGを駆使することにより、原作である同題のグラフィック・ノベル（劇画調の長編漫画）の世界観を忠実に再現することに成功した。その一方で、現実離れた（漫画的な）男たちによる戦闘シーンの過剰な演出は、日本では暴力的すぎるとしてR15に指定され、それがさらなる話題を呼んだ。

本作は漫画に依拠しているためか、歴史的な誤謬（あるいは行き過ぎた脚色）をあまりにも多く含む（スバルタ史家ポール・カートリッジには事前に問い合わせがあったらしいが、時代考証については質問されなかったという）。たとえば、戦象のみならず戦馬まで登場しているし、ペルシア軍への内通者エフィアルテスは地元民ではなく、スバルタ出身者に書き換えられている。しかし、その中でもっとも問題となったのは、ペルシア人の描写であろう。本作では、クセルクセスはスキン・ヘッドで顔中にピアスをはめた呪術師（ダンサー？）のようであり、ペルシア軍兵士は忍者服を着た殺人マシーンであり、女性たちは同性愛者のようである。このような無茶苦茶なイメージにたいして、特にイラン・メディアから激しい批判の声が上がリ、イラン大統領アフマディネジャドは、本作が自国にたいする「精神的な戦争」であるとは非難した。これにたいし映画会社ワーナー・ブросのスポークスマンは、『スリーハンドレッド』は史実に「漠然と」基づいているだけであり、「観客を楽しませることだけを目的としたフィクションの作品」である、したがっていかなる種類の政治的発言もするつもりはない、とのコメントを返したのである。

以上のような事件経過を振り返ると、ホールが示した、他の対立から解消へという見通しはやや楽観的過ぎるように思えるし、

特に彼女がエポック・メイキングな出来事として位置づけている『オルガスト』の上演が、親欧米政権のパフレヴィー朝下でおこなわれたことも、この印象を強める。ホールは一九九〇年代以降の『ペルシア人』の翻案については、アメリカとイラクに関係するものに限って紹介しているが、では、イランやその他の国・地域を意識した演出は存在するのだろうか、存在するならばどのような反応を引き起こしたのか、また存在しないならば、なぜペルシア戦争＝湾岸・イラク戦争という奇妙な構図のみが好まれたのか、興味は尽きない。いずれにせよ、二一世紀のアメリカが高い評価を得た『ペルシア人』の翻案と同時に、騒動を巻き起こした『スリーハンドレッド』も生み出したことは、意識しておくべきであろう。

また、評者はペルシア戦争は二つの側面から、ないし段階を踏んで神話化されていったと考えている。一つは大国ペルシアにたいしてギリシアの小国連合が一致団結して立ち向かったという神話化であり、もう一つはその勝利が後の世界、あるいは西洋文明の形成に決定的な意味を持ったという神話化である。前者の問題については、本書では第六章でマリノコラが論じており、戦後一世紀にすでに神話化されていたと理解できるが、後者については、本書では十分に論じられていない。現段階では評者も、この神話化が始まった時期について確信を持っているわけではないが、ローマ共和政期末の歴史家に注目する必要があると考えている。というのも、ローマ帝国による地中海世界の統一がなされたこの時期には、地域ごとに書かれてきたそれまでの歴史を統合することにより、世界史の叙述に挑戦した歴史家たちが登場したからで

ある。なかでも、ディオドロスはペルシア戦争にたいする自らの出身地シチリア島の貢献を強調することによって、ペルシア戦争を東地中海全体の事件へと押し上げたし、ポンペイウス・トログスはペルシア戦争史をラテン語で叙述することにより、ローマ帝国西方の読者にむけて発信した点で注目し値する。本書第七章でも、ローマ帝国ではペルシア戦争とバルティア戦争のアナロジイが好まれていたと指摘されているが、より重要なのは当時の人々が、彼らの世界・文明の形成に、ペルシア戦争がいかに寄与したと考えていたかを探るといふ視点であろう。本書は全体的にペルシア戦争にまつわるエピソードの拾い集めとの印象を受けるが、この神話化の過程を明確に跡付けられれば、各時代、地域においてペルシア戦争が語られてきたことの意味もよりクリアになるのではなからうか。

① 橋場弦(二〇〇四)「エビローグー古代から現代へ」桜井万里子・橋場弦編『古代オリンピック』岩波書店、二〇四―二〇九頁。

② 「レオニダス」のホームページ参照 (<http://www.leonidasalex.jp/>)。

③ 日本語版は、三宅真理訳(二〇〇〇年)『炎の門——小説テルモエユライの戦い』文春文庫。

④ USAトゥッパイ紙掲戦のカートリッジのインタビュー記事参照。

D. Vergano, "This is Sparta? The History behind the Movie "300"http://www.usatoday.com/tech/science/columnist/vergano/2007-03-05-300-history_N.htm).

⑤ G. Leupp, 'A Racist and Insulting Film: 300 vs. Iran (and Herodotus)' (<http://www.counterpunch.org/leupp03312007.html>).

(234x156mm, 472 Pp., Feb. 2007, Oxford University Press, £92.00)
(日本学術振興会海外特別研究員・リヴァプール大学客員研究員)